魅惑の楽園マンション

若妻と熟れ妻たち

天草白
挿絵／アレグロ

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　３０３号室　叔母からの魅惑の筆おろし……4
第二章　３０２号室　職場の女上司と性感レッスン……52
第三章　２０３号室　憧れの幼なじみと結ばれた日……102
第四章　２０３号室　可憐に捧げてくれた後ろの初めて……156
第五章　３０３号室　若妻と熟れ妻たちの蜜肌……207
エピローグ　魅惑の楽園マンション……256

登場人物 *Characters*

川村 正春
（かわむら まさはる）

大学進学を機に、都内の叔母の家に下宿することにした十八歳の男子学生。

川村 文香
（かわむら ふみか）

正春の叔母に当たる三十七歳の熟妻。肩までのボブカットに勝気な顔立ちの美女。夫が単身赴任中で熟れた肉体を持て余している。

高崎 栞
（たかさき しおり）

正春の幼なじみである二十一歳の新妻。黒髪ロングヘアで凛とした雰囲気の清楚な美女。正春たちの部屋の真下に住む。

徳野 詩子
（とくの うたこ）

正春のアルバイト先の人妻女社長で、優しげな雰囲気のある三十二歳のキャリアウーマン。マンションで隣の部屋に住む文香とは友人同士。

第1章　303号室　叔母からの魅惑の筆おろし

「いつまでも寝ていては駄目よ、正春(まさはる)くん」
艶のあるアルトの女声が耳朶に心地よく響いた。
川村(かわむら)正春は慌ててベッドから上体を起こして目を開ける。春眠暁を覚えずという諺そのままに半分まどろんだ意識の中、視界いっぱいに文香(ふみか)の顔が飛びこんできた。
「あ……おはようございます、叔母さん」
「おはようじゃないでしょ。そろそろ支度しないと講義に遅刻するんじゃない？」
悪戯っぽく笑った彼女は川村文香。母の妹に当たる女性だ。
今年で三十七歳の彼女は、肉親でさえドキリとさせるような妖艶な色香を纏った女性だった。
綺麗な焦げ茶色をした髪は肩まで緩やかなウェーブを描き、美しい光沢を放っている。切れ長の瞳には勝気そうな強い光が宿っている。
姉妹だというのに、いかにもオバサン然とした正春の母とはあまり似ていなかった。文字通り目の覚めるような美女だ。

「正春くんのお母さんから、あなたのことを頼まれてるのよ。落第なんてしたら、私の面目丸つぶれじゃない」
「だ、大丈夫ですよ」
冗談めかして笑いながらも、きっちりとプレッシャーをかけてくる文香に、正春はかなわないなぁと思いながらベッドから出た。
――都内の大学進学を機に、四月からこの家に下宿してそろそろ三週間が経つ。
叔母は都内在住のため、地方暮らしをしていた正春は今まであまり会う機会がなかった。
たまに法事などで顔を合わせることがあり、その艶めいた美貌に甘酸っぱい憧れを抱いたものだ。
文香の夫は単身赴任しているため、彼女と正春の二人暮らしだ。美しい叔母と過ごす一つ屋根の下での生活は未だに慣れなかった。
「朝ごはんはリビングに準備してあるわ。食べてから行くでしょう？」
「あ、は、はい」
返事の声が上ずってしまい、正春は頬を紅潮させた。
「ん、どうかしたの？　私の顔に何かついてる？」

「い、いえ」
叔母さんの顔に見とれていました、などと言えるはずもなく、正春は口ごもった。
文香と向き合うだけで緊張感と甘酸っぱい疼きが同時に込み上げてしまう。ごくりと喉を鳴らし、半ば無意識に視線を彼女の顔から下へと下げていった。
（す、すげぇ、叔母さんの谷間、丸見えだよう……）
文香が前傾姿勢を取っているため、豊かな膨らみは下に向かって垂れ、二つの肉丘が作り出す魅惑的な谷間が大きく開いた襟ぐりからほぼ丸見えだ。
まろやかな曲面を描く、抜けるように白い肌。
むっちりと肉の詰まった乳球が、叔母の息遣いに合わせて量感たっぷりに揺れているのが艶めかしい。
今度は意識してさらに体を前に迫り出した。
同級生などとは比較にならない熟れた色香に視線だけでなく、身体ごと引き寄せられてしまう。
さらに目を凝らせば赤いブラジャーの一部が覗いている。肉親が相手だからか、ブラチラにも無防備な様子だ。
（し、下着まで見えてるよ、叔母さんっ……）

一緒に生活している中で、洗濯籠に入っている下着を偶然見てしまい、興奮を覚えたことは何度かあるが、やはりこうして直接肌に身に着けているところを目にすると、その興奮の度合いは数倍増しだった。

じわりと下半身が熱くなり、若い肉茎が急激に充血するのを自覚する。

（まずい、勃っちゃう）

焦燥とは裏腹に、一度ペニスに集まった血流はそう簡単には収まらない。

血が繋がった実の叔母を目の前にして勃起してしまうのはさすがに気まずかった。

同時に、淫らな気持ちを感じてはいけない相手に感じてしまっているという背徳感が込み上げる。

しかしそんな禁忌を覚えるほどに、かえって興奮の度合いが増してしまい、パジャマのズボンの下で若い肉茎はどんどんと容積を増してしまう。

（ああ、もう、鎮まってよっ）

「どうかしたの、正春くん？」

文香が悪戯っぽい笑みを浮かべて、正春を見つめる。

あまりジロジロと見ていては、怪しまれてしまう。名残惜しい気持ちで視線を胸元から彼女の顔へと戻す。

「悪いけどゴミ出しに行ってくれるかしら。玄関前にまとめておいたからお願いね」
「あ、はい叔母さん」
ここに下宿してからは、ゴミ出しは正春の仕事になっている。
家庭用ゴミが入ったポリ袋を片手に持って、彼はマンションの正門付近にあるゴミ出し用のステーションへと向かった。

「し、栞(しおり)ちゃん……？」
正春は呆然と目を見開いて目の前の女性を見つめていた。
背中まである長い髪が春の風に揺れている。
気品のある清楚な顔立ちは五年前の面影を残しながらも、あのときよりもはるかに美しくなっていた。
身に着けている白いワンピースが、そんな清楚な美貌によく似合う。
「えっ」
つぶらな瞳が正春を捕らえ、わずかに大きく開いた。
ゴミステーションに到着したところで、ちょうどゴミを出し終えたらしい住人と出くわしたのだ。

その女性は、あまりにも幼なじみに似ていた。
（似てるけど……でも、まさか）
正春はごくりと喉を鳴らした。故郷から遠く離れた場所で出会うなど、偶然にしてもできすぎている。
「もしかしてマサくん？」
きょとん、と上品に首を傾げた彼女が尋ねた。
その呼び名は、間違いなく正春の幼少のころのものだ。そしてそんな呼び方をする女性は限られている。
「やっぱり……栞ちゃんなんだね！」
正春は顔をパッと輝かせた。声に喜びの色が滲む。
「嘘、マサくんも東京に出てきたの？」
「うん、僕はこっちの大学に進学したから、今は叔母さんの家に下宿中。三〇三号室に……」
「じゃあ真上の部屋だね。二〇三号室に住んでいるの、私」
彼女――宮原（みやはら）栞は小学生のころからの幼なじみだ。家が隣同士ということもあって、幼いころは実の姉弟のように育った。

正春にとって生まれて初めて異性を意識した相手だ。
結局、彼が中学に上がるころ、両親の仕事の都合で栞が引っ越してしまい、淡い初恋は終わってしまったわけだが――。
まさか地元から遠く離れた場所で五年ぶりの再会を果たすとは、運命じみたものさえ感じてしまう。
「すごい偶然だね。まさかまたマサくんと隣同士になるなんて……あ、隣同士じゃなくて、上下階か。えへ」
栞の優しげな表情も、清楚な美貌も、子どものときと雰囲気がまるで変わっていなかった。
幼いころに憧れた美少女がそのまま大人の美女に成長した感じだ。
（同じマンションに住んでいるなら、これからも会えるはず。栞ちゃんとまた一緒に過ごせるんだ――）
胸の中に甘酸っぱい想いが広がっていく。
幼いころに抱いた初恋の記憶が鮮やかによみがえり、心臓の鼓動が早鐘を打った。
「マサくんは大学一年生だっけ？　わあ、大きくなったね」
「子どもみたいな言い方やめてよ、もう」

互いに苦笑を交わす。
（栞ちゃん、いい匂いがする）
長い黒髪から漂う清潔なシャンプーの香りが鼻腔を心地よくくすぐった。
頬が熱い。
栞の何げない仕草の一つ一つが、柔和な微笑みが、正春の心を鷲掴みにして離さない。
不意打ちのような再会で自制心が完全に吹き飛んでいた。初恋の相手をここまで引きずっていたとは、自分でも呆れるほどだ。
「ん、どうした？　あたしの顔に何かついてる？」
あまりにもジッと見つめていたせいか、栞が怪訝そうに小首を傾げた。
「い、いや、なんでもないんだ。その、僕――」
（そうだ、さりげなくデートに誘うとか……あ、いやいや、いきなりはまずいよな。まずは栞ちゃんとの距離をもっと詰めないと）
頭の中で、幼なじみの美女とお近づきになる算段をシミュレーションする。
未だ女性経験がなく、恋愛ごとには滅法疎い正春は、こういうときどう振る舞えばいいのか分からない。

気の利いた言葉の一つでも言えればいいと思うのだが、ドギマギした気持ちのまま思考は停止状態だった。
「あのさ、栞ちゃんもこっちの大学に通ってるの？」
結局、正春が次に口にしたのはデートのお誘いなどではなく、近況を尋ねるごくありふれた質問だった。
「あたし？　あたしは大学には進学しなかったんだ。高校を出た後、こっちで就職してね――」
ということは、今はＯＬをやっているのだろうか。
正春の考えを遮るように、栞が踵を返した。
ワンピースに包まれた丸みのあるヒップが軽やかに揺れる。
昔に比べ、明らかに増した色香が全身から発散されて、息が詰まるほどだった。
ズキン、と我知らずズボンの下で正春の分身器官が力強い欲情の脈を打ち、反応してしまう。
「いけない。つい懐かしくて立ち話しちゃったね。あたしはお見送りがあるから、そろそろ行かなきゃ」
「見送りって？」

「夫の出勤を毎朝見送っているの。職場で出会った人と結婚して、そのまま寿退社したんだ、あたし」

幸せそうにはにかんだ笑みを浮かべた栞を見て、正春は絶句した。

全身が硬直する。

息が、止まる。

彼女の言葉の意味を理解するのに数瞬を要した。

「け、結……婚？　えっ？　えっ、栞ちゃんが……!?」

「じゃあ、またねマサくん。これからもよろしく」

長い黒髪を揺らしながら去っていく後ろ姿を、正春はショック状態のままいつまでも見つめていた。

（まさか、栞ちゃんが結婚していたなんて）

正春は自室のベッドに横たわり、天井を見つめたまま深いため息を漏らした。

３ＬＤＫのマンションで、正春は叔父の部屋を使わせてもらっている。

その日の夜になってもショックから立ち直れなかった。大学の授業もずっと上の空だったし、帰宅してからもこうして何も手につかない状態だ。

文香は階下の栞と多少の面識があるようで、それとなく聞いてみたところ、彼女は新婚三か月の新妻だそうだ。
今は宮原ではなく高崎（たかさき）という名字に変わっているということだった。
「高崎……栞ちゃんか」
他の男のものになってしまった栞。
あの美貌も、すらりとした身体も、服の下にある裸も――。
ベッドに横になったままペニスが勃起していくのを自覚する。下腹部にじっとりと熱が籠もっていく。
ムラムラとした気分で何とも落ち着かなかった。頭の中のモヤモヤが晴れない。
「ああ、もうっ」
正春は息を荒らげながら、ほとんど発作的にズボンとトランクスを下ろした。裸の下半身が外気に触れてヒヤリとする。
みぞおちの下で若々しいシンボルはすでに痛いほどに勃起していた。
なぜこんなにも気分が沈んでいるのに、自分の分身器官は元気に張り詰めているのか、と怪訝でならなかった。
あるいは、これが鬱勃起とでもいうものなのだろうか。生まれて初めて味わう感覚

だった。
大切な初恋の相手が別の男のものになってしまった悲しみや苦しみ、悔しさや嫉妬といったドロドロとした負の感情が、かえって興奮のスパイスになっているのかもしれない。
惨めで、打ちのめされて――だが、だからこそ込み上げてくる背徳の欲情。
「くそっ」
正春はどこにぶつければいいのか分からない苛立ちで大きく舌打ちした。
とにかく、このモヤモヤを放出したかった。
いちおうドアを少しだけ開けて、周囲の様子をうかがった。
(叔母さんはいないよな)
見るだけでなく、耳をそばだてて、文香の気配を探る。
これだけ警戒するのには理由があった。
一度オナニーをしている真っ最中に、部屋の外から叔母に呼びかけられたことがあったのだ。
そのときは幸いにもすぐにズボンを穿き直し、バレずに済んだのだが、まさしく間一髪だった。肉親に自慰を見られるなど、これほど気まずいことはない。

正春はリビングに続くドアが閉まっていることを確認すると、ふたたび部屋のドアを閉めた。
高まる興奮のまま床に胡坐をかき、垂直にそそり立つペニスを右手に掴む。指先に触れた肉茎は驚くほど熱く火照っていた。
「栞ちゃん……」
今朝の栞の姿を思い浮かべながら、正春は右手をせわしなく上下させ、膨張しきった己の分身器官を扱きだした。
手筒で肉棒を擦るたびに甘酸っぱい痺れが腰の奥から背筋にまで駆け上がった。
（もし僕が栞ちゃんと結婚していたら――）
たちまち頭の中に空想上の新婚生活が広がっていく。
新妻の栞はきっと清楚なエプロン姿に可憐な笑みを浮かべ、仕事帰りの正春を優しく迎えてくれるだろう。
だがその姿をよく見ると、エプロンの縁から二の腕や脇腹、それに太腿などがあらわに露出している。
他には何も身に着けず、素肌の上に直接エプロンしか着けていない――いわゆる裸エプロンなのだ。

「真面目で清楚なのに、そんな大胆な格好をして、栞ちゃんは」
言葉に乗せてみると、脳内のイメージがより鮮明になった。
（だって、マサくんが喜んでくれると思って）
栞は愛おしげな笑みを浮かべて、可愛らしくクルリと一回転してみせた。
背中を向けた際には、一瞬ではあるが剥き身の卵のように綺麗な曲面をしたヒップが目に映った。
「栞ちゃんのお尻……！」
ゴミ捨て場から去っていく際に目の当たりにした、ワンピースに包まれた丸い臀部を思い浮かべる。
そこから裸の尻を想像し、脳内にくっきりと投影した。
十八歳の旺盛な性欲そのままに、真っ白い双尻がリアルに浮かび上がる。
掌中の肉棒がびくんと力強く跳ねた。
「ね、ねえ、ここでしようよ、栞ちゃん……！」
正春は上ずった声で『妻』に呼びかけた。
食事も風呂も後回しでいい。一刻も早くこの美しい新妻を抱きたい。自分のものにしたい。

自分だけのものにしたい――。
正春は栞を背後から抱きすくめた。
未だ知らない異性の素肌の熱を感じる。
滑らかな臀部の肉を撫でさすり。もう一方の手をエプロンの中に差し入れて柔らかな乳房を掴み、揉みしだく。
（もう、マサくんったら上手だね……あたし、すごく気持ちよくなってきちゃったよ。ほら、恥ずかしいけどこんなに濡れてるんだよ？）
実際に女体を扱ったことなど一度もない正春だが、空想の中では性の達者になることが可能だ。
鮮やかな指遣いで、肌もあらわなエプロン姿の新妻から性感を引き出していく。
（いいよ、すごく。あたし、もうマサくんに夢中――）
背中越しに振り向いた栞は目をトロンと潤ませ、正春にねっとりとした視線を注ぐ。
そんな妄想をしながら、現実の世界の正春は垂直にそそり立つペニスを扱く手をどんどんスピードアップさせた。
肉棒に溜まる性悦の熱が、妄想に現実味を与えていく。
まるで本当に新妻の栞と自分が淫らな行為をしているような気分だ。

現実には実現し得ない夢が、初心な少年の胸を甘く陶酔させた。
「栞ちゃん……ああっ、栞ちゃん、僕もう我慢できないよ」
（あたしも……じゃあ、マサくんにもっと気持ちいいことしてあげよっか？）
どことなくお姉さんぶった物言いは昔のままに、しかしあの頃よりはるかに成熟した身体を妖しくくねらせ、栞は台所のサッシに手を突いて腰を突き出した。
エプロンに覆われていない無防備なバックヌードが眼前に晒される。
プリンと突き出された尻は、夫である正春を待ち望んでせわしなく揺れていた。
突き出された尻の狭間に、人生で一度も目にしたことのない生身の女性器が息づいている。
ネットの無修正画像などで仕入れた知識を元に、愛しい栞の神秘の秘園の形や色を必死で思い描く。
「挿れたいっ……挿れたいよ、栞ちゃんっ」
いよいよ、そこに挿入できるのだと思うと、右手に握ったペニスがいっそう熱く火照った。
垂れだしたカウパーが指先から付け根までをヌルヌルに濡らしている。
「いくよ、栞ちゃんっ……！」

熱の籠もった声で正春はいよいよ愛しい妻に挿入しようと、張り詰めきった先端部を尻の合わせ目に押し当てる――。
「正春くん……!?」
不意に声が響き、正春は表情を凍りつかせた。
いつの間にか開いていたドアの向こうに、叔母の姿があった。

室内の空気が凍りついた。
正春はペニスを握ったままの体勢で動きを止め、息を詰まらせてドアの傍にいる叔母を見つめる。
「ご、ごめんなさい。何度ノックしても返事がないから心配になって」
文香がこわばった顔で頭を下げたが、正春のほうは返答する余裕などない。
異様に速まった心臓の鼓動が耳の奥にまで響き、頭の中は灼熱状態で何も考えられなかった。
(叔母さんにオナニーを見られた……ど、どうしよう……!?)
混乱と焦燥、そして全身が燃え上がるような羞恥。
全身の毛孔が開いて生暖かい汗が流れ出した。

「……確かに、正春くんももう大学生だものね。そういう衝動もあるわよね。今朝も私の胸をジッと見ていたみたいだし」

驚いたような顔をしていた文香だが、すぐに穏やかな微笑みを浮かべて、そう慰めてくれた。

未だ呆然としたままの正春とは違って、すでに冷静さを取り戻したのだろう。三十代後半という大人の余裕を漂わせた泰然とした態度。

「でも、ちょっと没頭し過ぎじゃないかしら？　私が部屋に入ってきたのも気づかずに続けるのはどうかと思うわよ」

叔母の微笑が悪戯っぽい苦笑に変わり、正春は気まずさに目を逸らした。

確かにノックの音にも気づかず一心に自慰をしていたのはいただけない。栞のことを想うあまり、周囲がまったく見えていなかった。

大失態、だった。

「すみません。色々むしゃくしゃしてたっていうか、ショックを吹っ切りたかったっていうか――」

考えるだけでムラムラとした混濁した欲情が下腹を突き上げる。

叔母の眼前だというのに節操なくペニスが膨張を保っている。とてもコントロール

不可能な、はち切れんばかりの衝動。
性器が丸出しだということを今さらながらに意識し、正春は慌てて両手で覆うようにしてペニスを隠した。
文香が苦笑を濃くする。
「そういえば、夕食のときもボーッとしていたわね。何かあったの？　よかったら私に話してみて。一人で溜めこむよりいいと思うわよ」
確かにこうやって自慰で発散するのは健康的とはいえないかもしれない。人生経験豊かな叔母に相談すれば、少しはモヤモヤを吹き飛ばせるだろう。
「実は今朝、ゴミ捨て場で――」
正春は人妻となった幼なじみに再会した一部始終を文香に話した。
本当は、栞への恋心を含め、誰にも話さないでおこうかと思っていた。胸の内に秘めておく事柄だと思っていた。
だが、このまま自分の中だけに溜めこんでいては気が狂ってしまいそうだ。
一言も発さず正春の話を聞いていた叔母は、話が終わると深いため息をついた。
「そう、二階の高崎さんなら何度か挨拶をしたことがあるけれど、まさか正春くんとそんな関係だったなんてね」

「……初恋だったんです」
正春は深々とため息をついた。
子どものころ、近所の公園で日が暮れるまで一緒に遊んだ思い出。
小学校に上がり、男女を意識するようになってからは少しずつ遠のいた距離感。
中学から高校にかけて急速に女っぽく、魅力的になっていく幼なじみに対して、はっきりと自覚した恋心。
そして、別離と再会。
「偶然出会えてすごく嬉しかったのに、あっさりと手の届かない人になってしまって……驚いたっていうより、呆然としたっていうか。今でも信じられないっていうか。気持ちの持っていきどころが分からなくて、僕……」
言葉にすることで少しだけ気持ちがすっきりする。同時に心のもやもやはますます強まり、鈍い痛みとなって胸の芯に突き刺さった。
本当に好きだったのだ、とあらためて実感する。
別離の年月が薄れさせていた恋心は、再会によって当時のままに鮮やかによみがえり、正春の心を傷つけていた。
「せめて空想の中だけでもって思ったの？　やりきれない気持ちは分かるわ。でもね

正春くん、一人でしてもよけいに空しくなるだけよ」
叔母の言葉が心に沁みる。
「すぐに忘れることはできないでしょうけど。いずれきっと、あなたにふさわしい人が見つかるわ」
「見つかりませんよ、僕なんかに……！」
正春は口を尖らせた。自分でも子どもみたいだと思いながらも、拗ねた気持ちを抑えきれない。
これでは八つ当たりだ。
言った後で、ハッと口を押さえる。
勝気な叔母のことだから、こんな反抗的な言い方をしたら手ひどく叱ってくるだろう。
正春は反射的に身を固くした。
「……本当に傷ついたのね」
が、文香は正春を叱るでもなく、普段の勝気な叔母らしからぬ慈愛の笑みを浮かべて彼の肩をそっと抱いた。
年上の女の香りが鼻先に漂い、さっきとは違う意味で心臓の鼓動が速まる。

「仕方がないわ。叔母さんでよければ、正春くんのモヤモヤと解消するお手伝いをしてあげましょうか？」
予想もしていなかった提案に正春は言葉を失った。
えっ、と驚きながら美貌の叔母を見上げる。
文香はわずかに頬を染め、慈愛の笑みから小悪魔じみたそれへと表情を変えた。
「たとえ意中の相手でなくても、一人でするより女性にしてもらったほうが慰めになると思うの。それとも――こんな年増じゃ嫌かしら、ふふ？　しかも私たちは叔母と甥だものね」
「い、いえ、そんな！」
正春は慌てて首を振った。一回り以上も年齢が離れているとはいえ、この美しい叔母に対して不満などあるはずがない。
「本当に、叔母さんが……!?」
まだ半信半疑で文香を見つめる。
身体にフィットしたノースリーブの白いブラウスが豊満なボディラインを浮き立たせ、胸元をこんもりと盛り上げている。
紺色のタイトスカートはムチムチの臀部によって内側からぱつんぱつんになってい

るし、ベージュのパンストによって肉づきの豊かな太腿の量感がより強調されて艶めかしい。
彼女が浮かべる蠱惑的な笑みにいやが上にも淫らな期待感が高まった。
海綿体への充血は最高潮に達し、若い茎は早くも射精間際さながらパンパンに膨張する。先端からトロリとしたカウパーを垂れ流していた。
もしも両手でペニスを覆っていなかったら、美貌の叔母に向かって赤黒い鎌首をもたげていることだろう。
「本当のセックスをするのはさすがに近親相姦になってしまうし、手でしてあげるわね。それでいい、正春くん？」
「は、はいっ」
叔母の提案に一も二もなくうなずく正春。
二人で揃ってベッドに腰を下ろすと、四つん這いになった文香が身体を前屈みにして正春の股間に白魚を思わせるほっそりとした指を近づけていく。
緊張と期待感で胸が甘酸っぱく疼いた。息をするのも忘れて接近する指先を凝視する。肉棒を覆うようにして隠す正春の両手をそっとどかせる。
あらわになった剥き出しの性器をあらためて凝視され、羞恥の気持ちが一気に込み

上げた。子どものころ、お風呂に入れてもらったことはあるが、思春期を過ぎて丸出しのペニスを凝視されるのは、それとはまったく次元の異なる行為だ。

恥ずかしさと照れくささで腰の芯が甘酸っぱく蕩ける。その羞恥は不思議な快感となって、ペニスを疼かせた。

「うっ」

不意に、柔らかい指先が敏感な亀頭に妖しく絡みついた。痺れるような刺激が先端に走り、正春は我知らず呻き声を上げて腰を揺らす。

「まあ、すごく逞しいのね。ふふ、子どものころにお風呂で見た可愛らしいオチンチンとは大違いだわ」

手の中で元気よくビクンと跳ねる若竿に、文香はわずかに目を丸くした。それから妖しい微笑を浮かべる。先端から根元へ、また根元から先端へと、往復させて甥のペニスを扱き始めた。

「ふあぁ、き、気持ち、いいっ……叔母さ……はぁぁぁ、あうっ……！」

肉棒をさする指先から腰が砕けそうなほどの甘痒さを送りこまれ、正春はかすれた声で快感を訴えた。

男の快感のツボを心得ている絶妙の力加減で、ほっそりとした指先が肉竿の敏感な

部分に巻きついては圧迫する。
断続的に訪れる快感に正春は腰を不規則にくねらせた。
性のキャリアが違いすぎて太刀打ちなどできるはずもなかった。一方的に翻弄されている。
「もう少し弄らせてもらうわよ」
文香が悪戯っぽい吐息を肉棒に吹きかける。全身がゾクリと粟立った。
「く、ああっ」
鈴口の辺りを指先でくすぐられると、ペニスの芯に甘い電流が走る。亀頭の丸みに沿って叔母の手筒が狭まり、心地よい圧力をかけてくる。
ぱっくりと開いた鈴口からトロトロのカウパーが流れ出して、文香の美しい手を汚した。
「うあっ、叔母さ……それ、気持ちい……」
「初心な反応がたまらないわね。私まで興奮してしまいそう。ふふ、もっと気持ちよくしてあげるわ」
妖しく微笑んだ美叔母はおもむろに顔を下げると、柔らかな手筒の中で脈を打つペニスの先端部を咥えこんだ。

「うう、ぐぅっ」
亀頭に訪れた熱い口腔粘膜の心地に、正春は上体を弓なりにして喘いだ。
ペニスに感じる唇の柔らかさと唾液のヌメリ、そして絡みつく舌の感触は、童貞の大学生にとって生まれて初めて味わうものだった。
フェラチオされている――。
戸惑いや驚きとともに、あらためてその事実を噛みしめた途端、蕩けるように柔らかな舌肉がうねりながら肉茎の先端の丸みに沿って巻きついてきた。ヌメヌメとした舌肉で敏感な亀頭をキュッと絞られる。
手コキとはまったく異なる柔らかな圧迫感、そして舌の熱さ。
何よりもこれほどの美女が正春の性器を口に含み、舌や口内粘膜で絞り立てているという妖しいビジュアルが興奮に火をつけた。
(これが、フェラチオなんだ……！　こんなに気持ちいいなんてっ)
生まれて初めて味わう異性の口による愛撫で、脳髄に鮮烈な稲妻が突き抜けた。
両頬を窄めて一心にペニスをしゃぶる叔母の顔は、普段の怜悧な表情とはまるで違う牝そのものの顔だ。
頬を紅潮させ、口の端を唾液でテカらせながら、正春の分身に口奉仕する姿があま

りにもエロチックだった。垂れ落ちる唾液が肉竿の表面をコーティングして摩擦抵抗を減らす。

「ちゅ、む……オチンチンの先っぽ……れろぉ、トロトロの……んんっ……出てき……ふふ、気持ちがいいのね……んちゅぅ」

途端に叔母の顔の上下運動が一気にギアチェンジし、口腔粘膜による圧迫が今までとは比較にならないほど上がった。心地よい圧力とヌメリがペニスに次々と快感を送りこんでくる。

（そんなにされたら、すぐにイカされてしまう――ぐうぅっ）

正春は反射的に奥歯を噛みしめ、尻の穴をキュッと窄めた。

あまりにも簡単に射精してしまっては格好が悪い。男の雄々しさの象徴として持久力を示したい。

思春期の少年ならではの見栄が顔を出すが、熟練した口唇技巧の前にはそんな矜持など何の役にも立たなかった。叔母が顔を上下させ、口内でペニスを摩擦往復するたびに腰の奥が鮮烈な官能刺激で痺れる。

「ふふっ、正春く……んちゅ、すごくビクビク、震え……れろぉ」

上下動に合わせて揺れる茶髪を指先でかき上げ、文香は悩ましげな息を漏らした。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!